

[特別活動]

対人関係の向上を目指した取組としてのクラス会議の可能性

北野 稔*

1 問題と目的

(1) 問題提起

① 現在の学校が抱える問題

学級崩壊という言葉が聞かれるようになって久しい。旧文部省 (1998) は、学級がうまく機能しない状態を「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状況が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」と定義している¹⁾。河村 (2010) は、学級崩壊について、「1990年半ばころから、一斉形態の授業や学級活動が成立しない、いわゆる学級崩壊の問題がマスコミに取り上げられて、社会問題となっている」(p.47) と述べている²⁾。では、学級崩壊は実際にどの程度の割合で起こっているのだろうか。河村 (2007) は、学級崩壊の数について、「埼玉県で行った調査では、約10%の学校、約1%の学級で、学級の機能しない状況が起こっていることが報告されています (2005「学級がうまく機能しない状況」に関する調査結果：埼玉県教育委員会生徒指導室)」(p.62) と述べている³⁾。また、河村 (2010) は、「全国連合小学校長会 (2006) は、学級崩壊の状態にある学級は、小学校の8.9%に昇っていることを報告している」(p.46) と述べている。さらに、教育調査研究所 (2009) は、「標本数が少ないので、これをもって全国的な傾向ととらえることには、統計的に無理がある」としながらも、「都市部の小・中学校の管理職及び教師は、小学校の1/3程度、中学校の1/10強の学校に、学級崩壊が生じ、授業崩壊では中学校の1/4の学校で起こっている。特に区、市教育委員会の回答では、管内で、小学校2/3程度、中学校1/4強の割合で学級崩壊を確認し、小学校2/3強、中学校の1/3の割合で、各教育委員会は学級崩壊を確認していることを報告している」(p.8) と述べ、「注意する必要がある」ことを指摘している。現実には小学校教諭である筆者も、児童の立ち歩きや不適切発言により、学びを深める授業が行えない状態を経験した。また、他の学級や学校においても同じような状態があることを見聞きし、現代の切実な問題として受け止めている。また、児童間のトラブルが絶え間なく続いたり、担任が対応しきれずに心身を病んでしまったりする現状もある。これら授業が通常に行えない状態に対する対応は、現在の喫緊の課題であると考える。

	小学校 (118校)		中学校 (60校)		不明 (4校)	
	校数(校)	割合(%)	校数(校)	割合(%)	校数(校)	割合(%)
学級崩壊	39	33.1	7	11.7	0	0.0

小・中学校の管理職および教師の回答 (教育調査研究所 2009)

18区市	小学校		中学校		不明	
	校数(校)	割合(%)	校数(校)	割合(%)	校数(校)	割合(%)
学級崩壊	12	66.7	5	27.8	2	11.1

教育委員会回答 (教育調査研究所 2009)

② 対人関係を構築する重要性

河村 (1999) は、現代の子どもの特性について、「対人関係能力が低く、発達段階に応じた心が育っていない」(p.20) と述べている⁴⁾。また、赤坂 (2010) は、「学校で起こる問題は、そのほとんどが人間関係にかかわるもののだといっても過言ではありません」(p.15)「学級崩壊が起こる土壌として、教室内の人間関係が非常に貧弱なつながり方をしていることです」「これからの教育活動では、意図的に積極的に教師が子どもとつながり、そして、子ども同士をつなげていくことをしなくてはならない状況になっているのです」(p.19) と述べている⁵⁾。

河村や赤坂の述べるように、これからの学級経営においては、対人関係の向上に重点を置いて取り組むことが大切であると考える。

* 上越市立春日新田小学校

③ 対人関係の捉え方

良好な対人関係を築く能力を構造的に捉え、ねらいを定めて実践することで対人関係の向上が促され则认为。そこで、筆者は、対人関係の構築を構造的に、数値的に捉える手段として、学校環境適応感尺度（ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）「アセス」（以下アセス）に注目した。アセスは、栗原ら（2010）が複数の側面から学校適応感を捉えることを目的として開発した尺度である⁶⁾。アセスの活用は、良好な対人関係を構築する能力の客観的見取りを可能にする。アセスの構造は図1の通りである。

栗原らは、個人の対人関係の捉えを対人的適応としている。そして、対人的適応をサポート面とスキル面の2側面から捉え、更に、サポート面を3つの因子から捉えている。現在、「対人関係能力の向上」を目指した実践は多々紹介されているが、多面性をもつ人間関係能力の「どのような力」を育成するのがはつきりしない実践も多いのではないだろう

うか。アセスの構造を活用することは、ねらいを定めた実践を可能にする。また、因子は数値で表されるため、児童の現状や実践の効果について検証することも可能にする。栗原らは、因子間の相関について図2のように述べている。

相関図では、高い相関があることを双方矢印で示している。しかし、全ての因子を向上させるための支援は時数や教師への負担が大きい。そこで、筆者は友人サポートに注目をした。友人サポートは対人的適応の因子全てと相関関係がある。つまり、友人サポートを向上させることで全ての対人的適応を向上させることができると考えたのである。

④ 対人関係を良好にする具体的方策

栗原らと共にアセスを開発した神山（2009）は、友人サポートの向上に対する支援として「子ども同士の場の設定」をポイントとして、かかわり合う場（交流・共行動）、認め合う場（共感・承認）、支え合う場（共感・支援）の設定を挙げている（p.117）⁷⁾。子ども同士の場の設定を意図的にを行い、その中で良好な対人関係を構築するためのアドバイスや支援をしていったならば、友人サポートが形成されていくと考えた。

神山の提示する「子ども同士の場」をどこに設定するかについて考える。神山は、朝の会や帰りの会、休み時間、給食時、協同学習、ピア・サポート的交流学習、心理教育援助プログラムなどを挙げている（前掲書、p.117）。友人サポートを保障するためには、子どもがかかわる時間の確保が必要である。また、友人サポートを意識させていくためには、教師の意図的な支援が必要である。さらに、対人的適応の向上が現在の重要かつ喫緊の課題であることを考えると、授業として位置づけることが最適であると考えた。そこで、注目したのが、赤坂（2003）の提案するクラス会議である。

クラス会議は学級全員の話し合い活動により学級や個人の課題解決を支援する活動である。そして、クラス会議の大きな特徴が、子どもも主体の話し合いと子どもたちの選択・決定と実行である。神山の提示する子ども同士の場を設定するには、ふさわしい手立てであり、友人サポートも保障できると考えた。

これらの考えの基、筆者は、神山の提示する「子ども同士の場」を意識的にクラス会議に設定し、良好な対人関係を構築するためのアドバイスや支援を保障することで、友人サポートを向上させることができると考えた。

(2) 目的

以上のような考えの基、筆者は、学級がうまく機能しない状況、いわゆる学級崩壊を引き起こさないために、対人関係の向上を目指した取組としてのクラス会議の可能性について研究することとした。

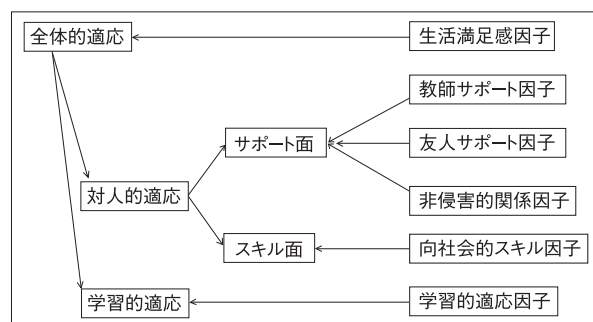
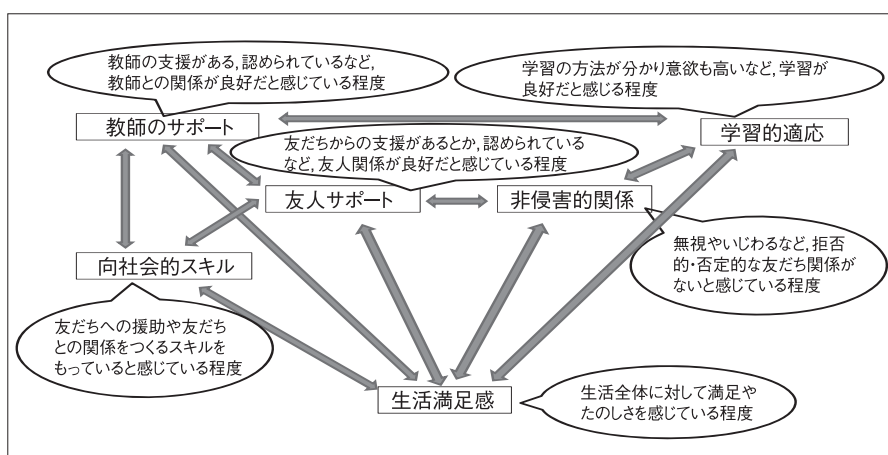


図1 アセスの構造



2 方法

(1) 研究協力者

A市立B小学校6年C組(33名)

(2) 調査期間

平成26年6月

(3) 検証方法

① 4月末と7月初めのアセスの結果を比較検証する。

② 2回のクラス会議後の自由記述を集約し、カテゴリー分類することで、クラス会議の効果を検証する。

(4) 学級の状態の把握

実践に先立ち、クラス会議を実践する前の4月30日にアセスで学級の状態を客観的に捉えた。アセスの数値について、栗原らは、「数値は、平均が50で、偏差値とほぼ同じような数値です」(前掲書, p.32)と述べている。(従って、アセスの示す数値を以下偏差値として、表記する)また、「40を下回るようであれば相当適応状態が悪いと考えられます。特に30を下回っているような場合、本人がSOSを感じている度合いはきわめて高く、本当に早急な支援が必要です」(前掲書, p.32)と数値の解釈について示している。この解釈は、個人のアンケート調査の結果を示す個人特性票についてであるが、栗原は、学級平均票についても「表や図の意味も読み取り方も同じです」(前掲書, p.28)としている。対象学級のアセスの結果は、表2のようになった。数値からは、6因子中で適応状態が悪い因子はないと判断された。

適応次元	第1回目
生活満足感	54
教師サポート	55
友人サポート	53
向社会的スキル	56
非侵害的關係	60
学習的適応	52

3 実践の概要

① コンプリメントの交換

認め合う場の設定として、「ハッピー・サンキュー・ナイス」の発表を行う。「ハッピー・サンキュー・ナイス」とは、自分の気分がよかったことや自分がしてもらったことに対する感謝の気持ち、友達のすごいなと思ったことを一人ずつみんなに発表する活動である。友人サポートは、友人から認められているとか、援助があると感じている程度のことであるが、友人サポートを向上させるためには、自分の発表を友人が聞いてくれる。つまり、自分の存在が認められていることを実感できるようにすることが大切にされなければならない。このような考えから、「ハッピー・サンキュー・ナイス」を必ず実施した。

② 話合いの場の設定

発表の場は全員の顔が見える場を作ることとした。顔を見て傾聴できる利点があるからである。共感と承認の第一歩は、傾聴である。話し手は、話を聞いてもらえたという感覚をもち、聞き手は相手を見て静かに聞くことで、相手を大切にしている気持ちが生まれると考えるからである。また、発表ではトーキングスティックを持った者だけが話せることをルールとし、一人ずつ順番に発言することとした。そして、子どもが相手を見て聞いている傾聴態度を取り上げて、その行為がもつ意味「相手を大切にしている心」について語り続けた。

③ 教師の支援

赤坂(2011)は、「騒がしく侵害的な言動が横行する学級でいきなり、クラス会議をするのは危険です。(中略)話合いの途中で傷つけ合ってしまうようなことが起こるのです」(p.106)と述べている。従って、赤坂のプログラム内容をそのまま活用することは危険である。学級の実態を把握した上で、プログラムを効果的に変更していきたいと考えた。行動観察から、侵害的な言動については多くの子が理解しており、侵害的な言動をとる子は少数であることを確認した。また、ルールを守ろうとする子どもが多くいることを確認した。そこで、言葉のスキル学習、聞くことのスキル学習、話すことのスキル学習を取り入れることとした。そして、一連のクラス会議では、意見交流の場を保障すること、子どもの望ましい言動を話合いの後や翌日の朝の会で学級全体に可視化することを大切にしたい。

④ 実践の流れ

赤坂(2003)は、同じくクラス会議を提案するネルセンらが、「クラス会議は、1日10分から20分の会議を毎日行う方がよい」としていることに対して、日本の教室における実践としては、週1時間の実践の方がなじみやすいとしている(p.50)⁸⁾。ネルセンは、担任が授業を自由に構成できるアメリカの実践として提案しているためである。

- ① ハッピー・サンキュー・ナイス
 - ② 前回の解決策の振り返り
 - ③ 議題の提案
 - ④ 話合い(解決策の提案・解決策の検討)
 - ⑤ 決定
- ・ルールなどは一週間試す。



また、ネルセン（1997）は、「週に一度だけクラス会議を持つことでも効果はあります」（p.52）とも述べている⁹⁾。そこで1週間1時間の実践を行うことにした。次に、クラス会議の1時間の流れについてである。赤坂（2011）は、話し合いの1時間の流れについて図3の通り示している（p.113）¹⁰⁾。本実践でもこの流れに従って行うことにした。

以上のことを考慮し、赤坂（2003）の提案する「クラス会議プログラム」を参考に以下のようにクラス会議の実践を行った。

回	活動内容	ねらい	児童の様子
1	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の指導「言ってはいけない言葉」 クラス会議の意義 	<ul style="list-style-type: none"> 対人関係に関するルール みんなの幸せのためにクラス会議を行うことを確認 	ゲーム遊びで頻繁に使う「死ね」という言葉が、実際に人に向けられたときに人を深く傷つけることに気付いていた。クラス会議を行うことに全員賛成挙手して、自分達で学級を作っていこうとする気持ちを高めていた。
2	<ul style="list-style-type: none"> 受容的な聞き方 ハッピー・サンキュー・ナイス 活動中に見られた望ましい言動を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 対人関係に関するルール 全員発言する。 聞くこと、拍手を送ることで相手を認める。 対人関係を築く言動を評価する。 	発表する人以外は話さないこと、相手を見て拍手を送ることが人を大切にすることだと気付いていた。それらを実践している児童を紹介すると、自発的に拍手を送っていた。「ハッピー・サンキュー・ナイス」を行うことで、笑顔が増え、温かな雰囲気になっていた。
3	<ul style="list-style-type: none"> 人を傷つけない話し方 ハッピー・サンキュー・ナイス 議題「席替えをしたい」について話し合う 活動中に見られた望ましい言動を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 対人関係に関するルール 全員発言する。 聞くこと、拍手を送ることで相手を認める。 賛成、心配な意見を出し、より良い解決策を決める。 対人関係を築く言動を評価する。 	出された意見に対しては否定せず、考えが違うときには「反対です」ではなく「心配です」というルールを守って、話し合いを進めた。実践できた姿を教師が紹介して、拍手を送った。相手を大切にしたい話し合いの気持ちよさを感じている様子であった。普段発言しない児童も発言し、拍手を受けて満足そうな表情が見られた。
4	<ul style="list-style-type: none"> 人を傷つけない話し方 ハッピー・サンキュー・ナイス 取り組みの振り返り 議題「私語をなくしたい」について話し合う 活動中に見られた望ましい言動を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 対人関係に関するルール 全員発言する。 聞くこと、拍手を送ることで相手を認める。 賛成、心配な意見を出し、より良い解決策を決める。 対人関係を築く言動を評価する。 	3時間目の話し方のルールを確認して話合った。「私語をなくすためにどうするか」について全員意見を述べた。全員が解決策を述べることで、みんなで気分よく学ぶことができる学級を作っていこうとする雰囲気が高まっていた。教師がルールを守る言動や人の意見を聞く態度を称賛して、拍手を送った。

4 結果

(1) アセスの結果

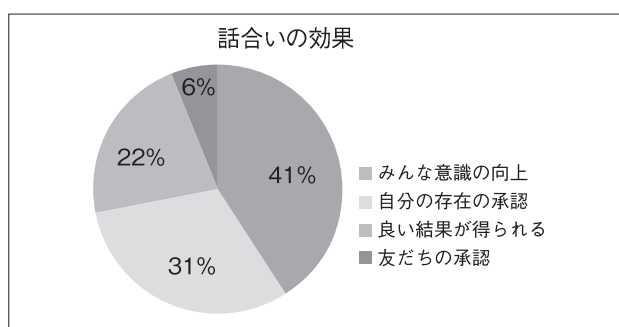
アセスの数値では、表4のような推移がみられた。なお、調査の日時は、第1回目は4月30日、第2回目は7月2日である。

友人サポートで4ポイント向上している。

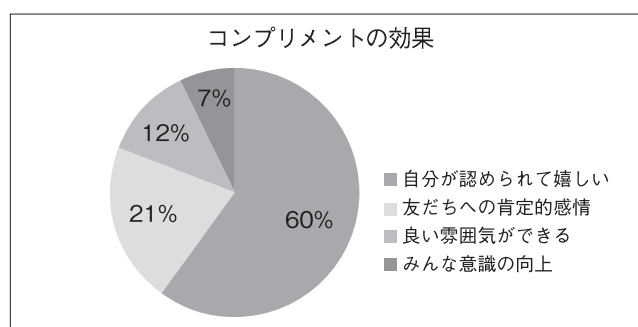
(2) 自由記述

クラス会議後に、『「話し合いをしていいな」と思うこと』『「ハッピー・サンキュー・ナイス」（コンプリメントの交換）をしていいな』と思うことについて自由記述を行い、カテゴリー分類を行った。

① 話し合いについて



② コンプリメントの交換について



適応次元	第1回目	第2回目
生活満足感	54	53
教師サポート	55	54
友人サポート	53	57
向社会的スキル	56	55
非侵害的關係	60	57

5 考察

(1) アセスの結果

アセスの数値では、友人サポートは4ポイント向上した。他の対人的適応では、ポイントの向上は見られなかった点を考えると、クラス会議が友人サポートの形成に効果があるという可能性が示されたと考える。1回目と2回目の友人サポートのポイントと比較すると、ポイントが上がった児童が18人、ポイントが下がった児童が8人、ポイントが変わらない児童が8人であった（1人はデータなし）。直接確率計算によると、片側確率で $p=0.076$ となり偶然確率7.6%であった。田中・中野（2004）は、「証明研究は有意水準5%を用いる。しかし、探索・発見研究は有意水準10-15%程度に見ておく。（中略）特に、自然・物理現象でなく人間の意識・行動を分析するときはそうする必要がある」（p.9）と述べている¹¹⁾。友人サポートのポイントが上がった偶然確率は、有意水準5%には満たないが、田中・中野の述べるように有意水準を捉えれば、クラス会議が友人サポートを向上させたといえる。従って、クラス会議を実践することが友人サポートを向上させ、いわゆる学級崩壊を引き起こさないための手立てとなり得る可能性が示されたと考える。本実践では、神山（2009）が提案する「子ども同士の場」を設定して意見交換の時間を確保したが、かかわり合う場では交流と共行動、認め合う場では共感と承認、支え合う場では共感と支援において望ましい子どもの姿を可視化し肯定したことが有効であったと考える。子ども同士の場の設定と教師の明確な意識の2要素が合致したクラス会議プログラムが友人サポートを向上させたと考える。

一方、関連の関係のある他の対人的適応の向上は認められなかった。この点について考察する。クラス会議の効果について、赤坂（2014）は、「継続は力なりと言いますが、クラス会議は特に継続していくことで成果が見えてくるものです。最低でも1週間に1度以上、2ヶ月くらい続けて、ようやく担任に効果が見えてきます。つまみ食い程度に実践したくらいでは効果は見られません」（p.26）と述べ¹²⁾、継続が効果をもたらすことを示唆している。本実践は1ヶ月の取組であったことから、友人サポート以外の対人的適応のポイントを向上させるまでには至らなかったと考える。また、神山（2009）が提案する「子ども同士の場」においては、かかわり合う場（交流・共行動）、認め合う場（共感・承認）、支え合う場（共感・支援）の設定の必要性が述べられているが、本実践においては、かかわり合う場（交流・共行動）の設定が不十分であった。クラス会議では、決定されたことを1週間みんなで実行して、1週間後に振り返りを行う流れになっている。しかし、本実践では、クラス会議による決定は2議題のみであった。決定と実行、振り返りを繰り返すことで交流と共行動の体験が積み重ねられて、友人サポートを更に向上させる可能性がある。赤坂（2011）は、『「子どもに残るモノは続けたこと」だけです』（p.13）とも述べており、クラス会議を継続することが、更に、友人サポートを形成していくといえるだろう。

(2) 自由記述

① 話し合いについて

自由記述からは、「みんなで決めることが良い」「みんなの考えを聞くことができるのが良い」など「みんな」というキーワードが多く確認できた。「みんな意識」の向上と捉えることができる。友人に対する意識の高まりと友人に対する肯定的な捉えであると考え。また、クラスの一員としての自分の存在を確認する記述も多くあった。

これらについては、全員発言のシステムが大きく関与していると考えている。全員発言が、友人理解を深め、友人に対する肯定的な捉えをもたせることに繋がり、友人サポート項目の向上に繋がったと考える。自分の考えを発表し聞いてもらう行為は、自分の存在がクラスに認められていることを実感できる体験であると考え。また、聞く側は、意見を聞いた後に、拍手を送ることが習慣化されてきていた。拍手を受けるということは、「意見」即ち「自分の存在」を認められた行為である。逆に言うと、聞く側の児童にとっては、発言児童の存在を認めることに繋がる。そして、その意見を肯定的に捉えた場合、その児童への信頼に繋がったと考える。

② コンプリメントの交換について

自由記述からは、「自分のことを言ってもらえると嬉しい」「ありがとうと言われて嬉しい」など「自分が認められて嬉しい」という思いが多く見られた。友人サポートは、「友達から認められたり、支援があると感じている程度」のことであるが、コンプリメントは「友達から認められていること」に繋がる行為である。また、「友だちの良いところを知ることができる」「友だちをすごいと思う」など友人への肯定的感情も多く見られた。肯定的にその子のがんばりを聞くことで、友人同士の認め合いが高まったと考えられる。今後も、コンプリメントの交換やクラス会議が継続されていくとすれば、友人サポートが更に向上していくことが期待される。

6 全体的考察と今後の課題

学級がうまく機能しない状況、いわゆる学級崩壊を引き起こさないために、対人関係の向上を目指した取組としてのクラス会議の可能性について研究をしてきた。そして、クラス会議が対人関係能力の向上に効果的である可能性が高まった。

しかし、現在の学校の問題点の一つとして、教科の時数確保などの理由で、人とのつながりを実感させる時間が十分確保できないことが挙げられる。栗原らは、「いじめられている子どもは、勉強どころではなく、学習適応が下がる可能性が高いこと」を指摘し、「安心で安全な教室環境・学校環境をつくることが学習的適応を促進する上できわめて重要である」と述べている（前掲書，p.12）。即ち、学習に支障が出るために、対人的適応を高めるための時間確保ができないという考えでは、かえって学習や生活において支障が出るのではないだろうか。また、栗原らは、「かつて子どもたちの問題がまだ複雑でなかった時代は、教師の〔経験と勘〕で十分にアセスメント（見立て）ができたし、介入についてもそれぞれで特に問題が生じるようなことはありませんでした。しかし、子どもの問題が複雑化・深刻化している現在、それだけでは通用しなくなってきています」と述べ、アセスメントの重要性について述べている（前掲書，p.51）。また、赤坂（2011）は、「最近、子どもがなかなか自分を表現しなくなったと言われます。そう、こどもの思いが見えなくなってきたのです」（p.19）と述べている。現在、教師の主観的な見取りに加えて、客観的なアセスメントの活用により、よりの確な実態の把握が必要とされているのである。今後実践を積み重ねた「学級状態と対応したクラス会議プログラム」が多数開発されることで、更なる対人的適応感の向上を目指したクラス会議の提案がなされと考える。

また、友人サポート向上の方策としてクラス会議を行うことはもちろんであるが、クラス会議の間をつないでいくことが重要であろう。今後は、神山の提示する「こども同士の場」を教科学習や短学活、給食、休憩時間に意図的に設定して友人サポートの形成に努めていく必要がある。

【引用・参考文献】

- (1) 教育調査研究所 2009 研究紀要第89号『学級崩壊・授業崩壊の予防と対策』 財団法人教育調査研究所
- (2) 河村茂雄 2010 『学級集団と学級経営』 図書文化
- (3) 河村茂雄 2007 『データが語る①学校課題』 図書文化
- (4) 河村茂雄 1999 『学級崩壊に学ぶ』 誠信書房
- (5) 赤坂真二 2010 『先生のためのアドラー心理学勇気づけの学級づくり』 ほんの森出版
- (6) 栗原慎二・井上弥 2010 『アセスの使い方・活かし方』 ほんの森出版
- (7) 神山貴弥 2009 「第6章 第4節教師が身につけるスキル」 石井眞二・井上 弥・沖林洋平・栗原慎二・神山貴弥編者 『児童・生徒のための学校環境適応ガイドブックー学校適応の理論と実践ー』 pp.112-117 協同出版
- (8) 赤坂真二 2003 『アドラー心理学に基づくクラス会議の効果の研究』 上越教育大学修士論文 未公刊
- (9) ジェーン・ネルセン リン・ロット H・ステファン・グレン 2000 『クラス会議で子どもが変わる』 コスモス・ライブラリー
- (10) 赤坂真二 2011 『学級づくり 成功の極意』 明治図書
- (11) 田中 敏・中野博幸 2004 『クイック・データアナリシス』 新曜社
- (12) 赤坂真二 2014 『いま「クラス会議」がすごい！』 学陽書房